

「クビナガリユウの発見」を読んで

四年生

ぼくはこの本を読んで、小学生でできたゆめが大人でかなったなんて、すごいなと思いました。

この本に出てくる人は、科学図かんが好きで、それを読み始めてから、きょうりゆうにきょう味が出てきたらしいです。中学に上がり科学クラブに入ったらしいです。高校に入り高校の先生がきょうりゆうの事を、いろいろ教えてくれたそうです。

そして、ついに化石をその人が見つけたそうです。その化石の名前が、クビナガリユウです。

この人はいっぱい努力しただろうと思います。ゆめはあきらめないで、ついに化石を見つけた時は、きつと感動したと思います。

短い内容ですが、わくわくする内容でした。それでぼくもあきらめずにお勉強をがんばりたいです。



「グッドジョブ」を読んで

四年生

●この本を読んで、アメリカのボランティアの事がわかりました。このお話はトモ君がアメリカに行くお話です。わたしはこのお話を読んで二つ分かった事があります。一つ目は、日本のボランティアとアメリカのボランティアがちがう事です。日本のボランティアは大人がやる物とぼしゅうやさそわれてからやるけど、アメリカは子どももやっていて、だれにいわれなくともやっていきます。私だったら足元や近くにゴミがあってもむししてそのまますむか、はしの方に動かしたりします。ちゃんとすてる人はとてもえらいと思いました。二つ目は「グッドジョブ」という言葉です。「グッドジョブ」とはいい仕事をなし終えた合図だそうです。他にも人の役に立つことや、かんしやされる事をしたら言われる言葉です。だから、私が「グッドジョブ」と言われたらとてもうれしくて「またやろう。」と思うと思います。「グッドジョブ」を読んで私も生活の中にゴミを見つけたらすてるなどをしてトモ君たちがやった事をしたいです。

●私も子どもと同様に「ボランティア」についての考え方の違いを知り、とても勉強になりました。日本では昔から「ボランティアの募集」があつたり「学生時代のボランティア活動は就職で有利になる」と言われたりするなど、自らの意見ではなく、相手や周囲からはたらきかけが先に来ていることが多いのに対し、アメリカでは「人から頼まれるものではない」という考えの下で、自分から率先して相手の役に立つこと、相手が喜ぶことを行う考え方です。そう考えることでお互いが何の負担もなく、幸せになれるのはとても素敵だなと思いました。

どんな小さなことでも「相手の役に立つ」ことがボランティアである、そんな考え方が日本でも定着すると良いなと思います。

子●トモがやった事ですすごいなと思った事は、まず一番目は言葉がつかない所に行くのがすごいです。

二番目にすごいなと思った事は、ブレットの言ったことが、きてから少ししかたつてないのわかるようになったのがすごいなと思いました。あと、トモとブレットは、マコト君がみんなと仲良くなれるように、ほつとかなに助けてあげていたのがとてもやさしいなと思いました。ぼくも、トモやブレットのようにやさしくなりたいです。

その気持ちを行動にして、人の役に立つことをこれからも少しずつしていきたいです。

親●トモのようにわが子も、新しいことにも勇気を出して挑戦し、そこから得られるいろいろな経験を通して人の気持ちが変わる人になってほしいと思います。人の為に自ら進んで役に立ち、自らもまわりの人に支えられて生活しているという感謝の気持ちを感じてほしいです。そして小さなことでも人の役に立つこと、身近にもできることがあるということとをわかってもらえよう私もそういう姿勢を子どもに見せていけるよう心がけたいと思います。



子●のぶおばさんは、一度でおわるようにメモをしていたのに、一度の帰り道にひまな橋で泣いている子どもにも出会ってしまったので、とまり客のお茶うけ用のおかしをやってしまつて、もう一度行くはめになったのぶおばさんがかわいそうだなと思いました。

でも「いくら暑さにまいていても、これを見すごせるのぶおばさんではありません。」と書いていたので、のぶおばさんはやさしいなと思いました。そのあとも「ちようど買ってきた薬よ。これを飲ませてあげなさい。きくからね。」と買ってあげていたので、のぶおばさんは心が広いなと思いました。そのおかげで、助っ人さんがきてよかつたなと思いました。

親●のぶおばさんの民宿でおこつた出来事の物語でした。

不便な場所に動物たちと一人で生活していますが、とっても元気で、毎日楽しそうでいいなと思いました。心が穏やかで広いからこそ(後にカッパと分かる)子供を自分が大変な思いをしても助けてあげ、忙しくてもそれをやりがいに感じ、働けてすばらしいおばさん。

日々の仕事にうんざりしたり、なかなか人の困っている所に目を向けられていない自分を省みる事が出来た、とても素敵なお話でした。

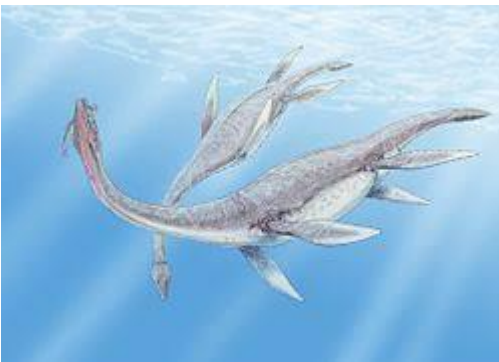
子●ぼくは、クビナガリユウの発見をよんで、クビナガリユウはヒレを広げるとはばが三メートルあることが分かりました。

世界じゅうで発見されたクビナガリユウとはちがった新しい種類なのがびつくりしました。

種類もちがうから、名前をかえて「フタバスキリュウ」と名付けられたそうです。今は、いわき市のはく物館にてんじされているそうです。泳ぐときは鳥のつばさのようにヒレを広げて首を高々と上げて泳いでいたそうです。

親●恐竜や生物の化石の採取は、すごく根気がいって、大好きという気持ちや興味があつてここまでずっと探し続けられるのだと思うと、そういう物を見つければ楽しいだろうなと思えました。

「化石は見つけようとしても見つける事はできない。神様のさずかりものだから。」とありましたが、確かにそうかもしれないませんが、作者の化石を見つけないという気持ちがあつてのことなので、子どもにも何でもいいので、そういうワクワクする気持ちになる物ができたらいいなと思えました。



子●私は、「菜の花荘が大いそがし」を読んで、のぶおばさんは、やさしい人だなと思いました。

のぶおばさんは暑さが大の苦手なのに、泣いている男の子を放っておけずに、暑い中買ってきたとまり客用のおかしや、歯がいたいお母さんのために薬をあげていた所がやさしいなと思いました。とまり客用のおやつや、薬をあげたおかげで、暑い中二回目の買い物に行かないといけなくなるまで気づかなくてあげていた所もやさしい人だと思いました。

薬をあげた男の子は、カッパでびつくりしました。そのお父さんが薬をもらったお礼に手つだいに来た事はだれも知らなくて、さい初、私はみやこがつれて来た助っ人さんだと思っていたけど、本当は男の子のお父さんで、薬をもらったお礼に来ていて台所などをピカピカにしてお礼も受け取らず帰ってしまったけど、わたしはカッパの親子はいい人たちだなと思いました。

親●このお話を子どもと読み終えて、子どもと顔を見合わせて「おもしろかったね」と笑いました。何と言つても小さな民宿を営む主人公のぶおばさんがステキでした。いつも元気いっぱいパワフルなのぶおばさんに、読んでいるこちらまで元気をもらいました。誰かのために忙しく働く姿や、困っている人を放っておけず気にかける姿は、まねしたいね、こんな人ステキだねと子どもと話しました。

助けてあげた男の子がまさか…の登場人物で、不思議でとてもおもしろなお話でした。なかなか長い物語を子どもと一緒に読む機会はなかったので一緒に楽しむことができ、いい時間でした。